

ネフスキーさん！

小磯 まさひろ

—

振り向かなきゃ良かったんだ。知らない男の呼びかけなんかには。

「その奴！」

声をかけたのは体格のいい二人の男子だった。一人が長髪で男なのに黒いヘアバンドをしている。もう一人は色白の男子だった。学ランの校章が違うから、うちの学校の奴じゃないと思うけど、たぶん三年生だと思う。「こっちに来い」と言われて、ノコノコついって行ったのがそもそも悪かった。

下校途中にある神社の裏に連れられた。当然嫌な予感はしていたのだが、場に居着いてしまつて足が動かない。その悪漢（と見なす）二人組が

「メガネくん、金貸してくんねえ？」

とニヤついて訊いてくる。なんて嫌な顔だ！

少年漫画の主人公だったら、この顔に拳を叩きこむのだろうか。

俺が読んできた少年漫画のヒーローだったら…。

出来るわけない！

仮に一発先制できたとしても、そのあと一方的な反撃にあうのは必至だ。

(土下座でもしようか——)

いや、それはあまりにも情けないではないか。そうだ、「土下座だけは勘弁してください」と言えばいいか。土下座しながら。ん？ 何を考えてるんだ俺は。

足元の砂利を踏みしだき、しばし逡巡している俺に色白男の方が「おー？ いくら持ってんだよ！」

と凄んできた。

そうだ。ここは野良犬に噛まれたと思って、大人しく財布を出すのがクレバー。うん、怪我してもつまらない、無駄。それが賢い選択なんだ…。そう思い財布を取り出そうとしたとき。

「ニエーット！」

高音の、しかし芯のある声が割って入ってきた。

少女——外国人？

栗色の髪、灰色の瞳、桃色がかった白い肌、小さなレンズに対して存在感のある黒縁眼鏡をかけている。高校生くらいだろうか？ 変なキャラクターが描かれている緑のTシャツにジーンズという格好で服装は子供っぽい。しかし、

(かわいい…)

「サバーカ！ エータ ターク ストリヨムナ！」

女の子が何ごとかをまくし立てながらズンズンと悪漢に向かって迫っていく。

「何だこいつ…」

「英語わかんねーよ！」

悪漢をたじろかせた女の子は一瞬こちらにアイコンタクトを寄せた…ように見えた。

助けてくれるのか？

女の子を置いて行くことに一瞬申し訳なさを感じたが、呪縛が解けたように俺は走り出していた。ひと言だけ悪口を放ったのは俺のギリギリの勇気からだった。

「英語じゃねーよ！ バーカ！」

英語じゃない——あれは、多分、ロシア語だ。

二

何がギリギリの勇気だ！ 女の子を置いて逃げるなんて！

その日は帰りの電車でも、風呂でも、布団でも、強烈な自己嫌悪に陥った。

（あの娘は大丈夫だったろうか）

悪漢を憎む以上に弱い自分が情けなかった。これだったら殴られ

た方がましだと思えた。

(殴られてでも立ち向かうべきだった)。

少年漫画の主人公なら、そうしたはずだ、きつと。

翌日も悲憤覚めやらぬ。神社のそばを歯ぎしりしながら、いるわけの無いあの娘の影を探しながら登校すると、朝のホームルームでは担任の狭間先生が意外なことを口にした。

「この時期に珍しいけど転入生が来ました。みんなびっくりするよー。世紀末よー」

先生に導かれて入って来たのは栗色の髪で黒縁メガネの昨日の女の子だった。クラスがざわめく中、俺はまじまじとその娘を眺めた。見る限り怪我はないようだった。

「イリーナ」ネフスキーです。ロシアから来た。おとーさんの仕事でいわきに来た：です。高月高校二年七組のみなさん、ドーゾよろしくおねがいます」

「というわけで、ソヴィエト：ああ、今はロシアね。なんとロシアから来たイリーナさんでした。それじゃね、一時間目は私の英語の時間だけど、授業じゃなくてイリーナさんへの質問タイムにします。ひとり一問ずつイリーナさんに質問する。イリーナさんは答えられるものは答えていく。ええと英語は話せるんだっけ？」

「日本語の方ができます」

「では日本語で質問していいから。一分後に安達さんから番号順に行きましょう」

「すげっすげっ」「やべー、かわいい」「彫りが深いなー」「何部に入

るかなー」

と男女ともにクラスはざわめいていた。確かに改めて見るとかなり可愛い。顔立ちはクラスの鈴木さんの方が整っているが、赤いリボンがついたブラウス、クリーム色のセーター、チェックのスカートという女子高生スタイルが、イデア界の住人のごとく似合っていて、その姿は尊崇に値する。もし俺が縄文時代の高校生で、彼女が転校して来たら神と崇めて土偶を捏ねたいくらいだ。

「ほーら、一応授業中だよ。静かに。じゃあ安達さん」

「ええとえ、安達ですーす。ロシアはどれくらい寒いですかあ？」

「私はイルクーツクという所から来た。冬はマイナス四〇度になるです。とおっても寒いけど雪は降らない。少し降る。夏は暑いよ」

先生が黒板に東ユーラシアの地図を描き、イルクーツクの位置を示した。バイカル湖という三日月形の湖の近くにあるらしい。

「猪狩順一です。日本語はどこで覚えたんですか？」

「すぐく子どもの頃の日本語学校で覚えた。日本に来ることが決まっってから勉強した。ええと、イツシヨウケンメー？」

みんなが笑った。

「遠藤俊夫です。好きなスポーツは何ですか？」

「フィギュアスケート！ ロシアのプルシエンコはカッコいいよお。きつとナガノの次のオリンピックに出ると思うよ。みんな見てー」

「大杉です。部活は何に入るの？」

「スケートブがあればスケートブに」

「ないです」と先生。質問は続く。

「小池澄香です。日本に来て驚いたことは何ですか？」

「水道の水がそのまま飲めること。シャワーしても髪がカタクならないことです。ロシアの水はカタいです。あとトイレのウォッシュレット、あれはいいですねー」

クラスに大きめの笑いが起こった

「佐藤歩です。きょうだいはいますか？」

ネフスキーさんは、少し考える様子を見せて、

「もうすぐ妹か弟が生まれる。夏に生まれる予定なのです」

と応えた。

「鈴木久子です。おうちの方のお仕事もいわきな？」

「ソーです。おとーさんは日本のセンザイを作る会社に来ました。

あ、あと私のヒーローさんもいわきに来たことがあるみたいなの。

勉強をしていました。アレクサンドルⅡネフスキー。しってるかい？」

知らない。周りのみんなも顔を見合わせている。次は俺の番だ。

「須藤哲夫です」

こちらを見るネフスキーさんの口が「あ」の形になった。どうや

ら昨日助けたのが俺だと気づいたようだ。

「好きな異性のタイプは何ですか？」

「危ない時でも立ち向かって、私を守ってくれる人です。きみはど
うかー？」

屈託ない彼女の笑顔に、俺は消え入りそうになったが、辛うじて
周りの合わせてぎこちなく笑うことはできた。

ネフスキーさんの席は窓側から二列目になった。俺の席とは離れ
ているし、一日中ネフスキーさんの周りに人が集まっていたので、
お礼も謝ることもできないまま放課後になってしまった。

うん、切り替えよう。過ぎたことを長く悔やんでも仕方がない。
ちらりとネフスキーさんの方を見る。女子たちと談笑していた。

(明日話しかけよう)

俺は教室を出て別棟の郷土部の部室に向かった。高月高校では毎
年九月に文化祭がある。俺は部長として郷土部の研究発表を企画し
なければならぬ。文化祭まであと四カ月、とりあえず研究テーマ
を決めねばならない！

…ことは分かっているのだが、ここ最近毎日部室には来るのだが、
つい本棚の整理や、先輩が残したマンガ読み、A4の白い紙に陰影
をつけた大小の立方体を描くこと、などにかまけてしまいテーマが

決められない。

(湯本の炭鋤、小名浜の磨崖仏、内郷の浄土信仰…ネタがないわけじゃないんだけど)

どうもピンと来ないのだ。

今日もまた漫画を読もうと本棚に手を伸ばすと、部室のドアを誰かがノックした。

郷土部には卒業した二つ上の先輩がいて、昨年の文化祭では先輩たちを中心に、飯野八幡宮についての研究発表&巫女さんのコスプレを行っていた。今は三年生の部員はおらず、新一年生の入部もない。

そもそも何だよ「郷土部」って。

俺だって兄に頼まれて入部しただけなのに、気が付けば部員一人の部活の部長になっている。だからうちの部室に用事があるやつなんているはずないのだ。顧問かな、と思えばドアを開けると、

「あ…え？ ネフスキーさん？」

「あら、スドー、きみはキョードブなのかー？」

よく俺の名前を憶えてるな、と思ったが昨日の件があったからかと気づいた。

「うん。あの、ええと、昨日はどうもありがとう。ごめんね、自分だけ逃げちゃって…」

うう…自分で言ってる情けない…。

「あー、やっぱりきみかー。いーよいよ。びっくりしてたよ、あの人たち。抜かれてたよ。えーと…ドギモ？」

白人美少女とドギモという単語のギャップがツボに入りそうだったが、やっぱり後ろめたくて、俺はまたモジヨモジヨ笑った。

「で、郷土部にはどうして来たの？」

「クラスで話したアレクサンドルⅡネフスキーのことを覚えてるかー？」

「うん、ひいおじいさんっていう」

「そのヒージーさんが歴史の勉強をした。本は書いてないけどノートを残した。私それ読んで。せっかくいわきに来たから。ヒージーが見たものを自分も見たいと思って。ここで何かわかるかー？」

「えーと、どうだろう」

部室にある『いわき市史』の索引を引くと、確かに見つかった。

「すごい！ 出てるよ。アレク…さんが」

「何、書いてあるか？」

「へー、柳田国男とも交流したんだ」

柳田国男なら知ってる。民俗学の祖だ。ちなみに俺の兄は大学で民俗学を専攻している。

「色々なわきや相双地区——いわきの北の町のことね。俺もその
檜岡って所から高月に来てるんだけど——その辺の農家の風習とか
儀式とか調べたんだって。確かに郷土部っぽいことしてるね」

「ヒージーのこと郷土部ならよく分かるか？　じゃあ私郷土部に入
るー」

「え？　ほんと？」

思わぬことで部員が増えたことに驚いた。

（あ、このアレクさんのノートを調べていけば文化祭のテーマにな
るんじゃない…）

「ホントウ」

こくりこくりとネフスキーさんが頷く。

「どうぞ！　オーケー、ウェルカム！　一緒にアレクさんのノートを
解き明かそう！」

それだけじゃない。これを機にネフスキーさんと仲良くなれたら、
付き合うことになって、結婚なんてなったら…。おいおい…里帰りが
大変だな。イルクーツクって言ったっけ？　いやでも意外と九州
ぐらいの距離って言ったな、先生が。だったら…結婚しよう！

——と俺が将来設計を練っていると須藤イリーナ、旧姓イリーナ
||ネフスキーさんが声をかけた。

「それに君の名前、ヒージーのノートに出てたよ。ナラオカのスド

ーって」

三

橿岡駅に迎えに来てくれた軽トラの中で、俺はネフスキーさんの「今日の」出会いと入部のことを運転席の祖父に話した。一九二五年生まれの祖父は、戦争末期に徴兵され、シベリア抑留の経験があるのだ。

「イルクーツクってところから来たんだって。じいちゃんがいたあたり？」

「オレがいたのはその近くのチタって所だ。つらがつたなあ。寒いのも大変だったけど、ソヴェエトの社会はお互いを批判し合わなくちゃいけないぐって、それが嫌だったな『おめえのナニナニは革命的でない！』とか」

「楽しい思い出は何にもなかった？」

「んだなあ…。つらい毎日でも…つらい毎日だからこそ日常の、少し面白い所を見つけようとはしてたべか。怖い監視のモノマネをしたり、ロシアの美人の話をしたり…。ユーモアというか…。ロシアの娘は胸が大きくてな。じいちゃんたちの間でこんな川柳をこしらえたんだ、『オッパイが先に出てくる街の角』」

にやりと笑いかける祖父にどう反応していいか分からない。

(ネフスキーさんの胸は普通だな)

と考えを巡らせてしまったが、頭を振ってすぐそれを打ち払った。いかん、ネフスキーさんの魅力は肢体の数値ではない。あつ、いや、そういうのに魅力がないわけではないが、ユーモアと慈悲の律動が伴った彼女の存在は俺にとって崇拜の対象のような存在になっている。

「でさ、ネフスキーさんとしてはひいおじいさんのノートを解き明かして、調査された風習が今どうなっているのか知りたいんだって。じいちゃんも協力してよ」

兄が大学で民俗学を学んでいることはすでに述べたが、彼が自己推薦入試のために作成した民俗学のレポートは祖父の協力によるところが大きい。アレクさんが調査した風習なども祖父ならば知っているかも、と考えたのだ。

「そうそう、そのノートを見ると、ひいおじいさんはうちと同じ須藤さんって人の所でも調査してるんだってさ。しかも橿岡町の！うちかもしれないんだから」

橿岡町には須藤姓が多いが、もしそれがうちだったらまさしく運命的だ。

「そりゃあすげえな！ ああ、協力すんのはかまね。今度そのイリーナちゃんをうちに連れでぐつといい」

「えー！ いいよ。わざわざ来て貰わなくても」

「いや大丈夫だ。ロシア人はそごらへん気軽だから。オレもそのノートの実物を見てみでえし」

「でもロシア語が読めるわけじゃないでしょ？」

もちろんネフスキーさんを家に迎えるなんて素敵なのは、考えただけでも胸がときめく。しかし何か、自分から女性に声をかけて、ましてや自分の家に招くなんて…。

「んだけどノートには文字だけでなくて絵もあつぺえ。多分。それ見られればピンと来ることもあつからな。調査のためだ、哲夫！」

また祖父がこちらを向いてにやりとした。まるで俺の迷いに大義名分を与えるように、「調査」を強調した。

——だよなあ。

そして俺はまさしくそれに食いついてネフスキーさんをお誘いする正当性を得た。

——いやでも、断られたらどうしよう。

チャンスの女神は行動する者にこそ微笑むのだ。

ドキドキしながら数日後（決心するのに時間を要した）ネフスキーさんに話をする、果たして祖父が言った通り民族性によるものか、それとも彼女自身の気質によるものか、いともあっさり誘いを

受けて、さっそく次の日曜、俺の家に来ることになった。

祖父と駅に迎えたイリーナさんは対面以来の私服だった。赤いTシャツとGパン、サンダルにパステルカラー縞模様のリュックを背負っている。制服も可愛いが私服もかわいい。結局かわいい子は何を着ても可愛いのか。神よ。

軽トラの荷台に二人で乗って、我が家に向かった。天候は晴れ。

五月のきらめく青空の下、田植えのあと少し伸びた稲が風に揺れている。

「あれウチの田んぼ」

「オコメつくる場所な」

とネフスキーさんがそちらに顔を向けた。髪が渦巻く風に暴れている。

「いいなー、自分たちで作った食べ物を食べるなんてな」

こちらに振り向いたネフスキーさんは微笑んでいた。けどその眼は少し悲しそうだった。髪が頬に張り付いて表情を隠す。なんだかそれが傷みたいに見えた。

ウチの人懐っこい飼犬の歓迎を受けたのち、ネフスキーさんは祖父の部屋に通された。布団を外したコタツ卓の奥に祖父、手前に彼女、右側に俺が座る。ネフスキーさんは畳の上で座布団を当てるのは初めてとのことで、どう座るべきか色々試していたが、スネを

「ハ」の字に開いて座布団に尻を乗せてペタンと座り、祖父の出した緑茶の匂いを小動物のように嗅いだ。どうやらその恰好で落ち着いたようだ。

「ええと、改めて自己紹介します。オレがこの子のじいちゃんの名前、藤正宗です」

「イリーナさん、ネフスキーです。どうぞよろしくおねがいます」

「話は哲夫から聞いています。貴重なノートをお持ちだそうで」

「ハイ、コレです——」

ネフスキーさんがリュックから古びた手帳を取り出した。小口が黄色く変色していて、ところどころ破れている。糸綴じで背表紙は布製のクロスだ。日本製、のように見える。

「では失礼して——」

祖父がページをめくる。俺も手帳に顔を近づけた。ページに罫線はあるものの、鉛筆で書かれたロシアのキリル文字がそれを無視して闊達に踊っていた。よく見るとロシア語だけではなかった。漢字交じりの日本語、それに英語も使われているようだ。

祖父の読み通り、所々にイラストもある。アレクさんはやはり当時の日本の習俗に興味があったようで、当時の服装、道具、路傍の

石塔、寺社の建築と狛犬などが描かれている。シンプルだが特徴が出ていて上手い。あるページではとりわけ大きなイラストがあった。

「ヒージーがスドーさん、という人の所でみせてもらったのはこれです」

祖父のページをめくる手が止まるとネフスキーさんが口を開いたのはほぼ同時だった。

「これは…庚申さまの掛け軸だな」

「コーシンサマ？」

「んだ。掛け軸をうつした絵だべな。確かにこの地区のものでしよう」

手帳の左側のページに三つ目四本腕の憤怒の形相をした仏が描かれている。明王のように見えるが、髪は天を突き、右手前の腕の先には人形？の髪をつかんでいる。仏絵の下には見ざる言わざる聞かざるのいわゆる三猿の絵があった。

「ああ、ほんとだ！ これ庚申さまのだねえ！」

わが地区では何軒かの家で庚申講というグループを作っている。

年一回ほどの割合で我が家も会場になっており、この掛け軸も何度か見たことがある。

「アレクサンドルさんがここにある須藤の家に来たのはいつごろだべか？」

「一九二〇年の夏です」

「ほおー、オレが生まれる五年前だな。親父から外国人がウチに来たって話は聞いたごとねえがら、やっぱウチでねえ別の須藤さんかもしれないねえな」

「ソーですかあ。ザンネン」

と言ってネフスキーさんが俺に笑いかけた。俺も笑顔を返す。ネフスキーさんと話していると俺のぎこちない笑顔が自然なものになっってくる感じがする。

「ええとねえ庚申っていうのは、暦の上——カレンダーの中で？ 庚申の日があつて、この日は担当の家——宿^{ヤド}っ言うんだけど、そこに集まつてこの掛け軸をみんなで拝むんだ。『オオ コウシンメイ コウシンメイ マイタリマイタリ ソーワーカー』つて。三十三回」

「で、そのあとはみんなで直会^{なおらい}——ご馳走^{ゴッツキ}食べてお酒飲むんだ」と祖父。

「これは何かのカミサマなのか…？」

イラストを指さしてネフスキーさんが訊いた。

「皆がちゃんとマンマ食^マられるように拝んでんだな。豊作祈願。元々は長生きの神さまだなんて聞いたことあつけど。…んだ！ ちよūd次^{つぎ}の庚申さまはうちが宿^{ヤド}なんだ。イリーナさんも来て見てみればい^いが^つぺ。きつとアレクサンドルさんも見た掛け軸だぞ」

「イー考えですな！ それお願いします」

笑って頷いた祖父は再び手帳をめくり、その他説明できる箇所について話をしてくれた。俺は文化祭のこともあるので、それをノートにメモしていたのだが、ネフスキーさんの方は、じつと祖父の言

葉に耳を傾け、時折、彼女が聞いたことがないであろう日本語の熟語や単語を小さな声でぶつぶつ繰り返している。そういえば授業中の彼女もそうだ。授業内容とともに、先生が話す日本語もそこで吸収しようとしているらしく、先生の言葉を口内で転がしているさまをしばしば見た。その一方であまりノートはとらず、教科書などにはロシア語で書き込みをして済ませている。文字はまずカタカナから覚えているようだ。これは彼女がご両親から持たされたポケットベルがカタカナ表示のためとのこと。

数学の問題が当てられたときは、ややムズな問題でも眼鏡を光らせてスラスラ解いていた。あ、あと体育は普通か、やや得意みたい。この前の体育で外周走らされている時、女子のドッジボールを見かけたんだけどネフスキーさんが最後まで残ってたから。

逆に国語、特に古典は苦手だ。当たり前といえど当たり前で、俺も古代ロシア語なんて授業があったらツライ。眼鏡も輝きを失い割れそうだ。

「ところでイリーナさんはイルクーツク出身なんだって？」

「どうやら話せるところは全て話したらしい。手帳を返しながら祖父が訊いた。」

「ええ、まあ、ソーです」

「オレ、昔行ったことあんだあ。イルクーツク」

「え？ そうなの？」

「んだ。シベリア抑留されでだチタに行ったとき…あれは昭和天皇が死んだ年だから平成元年か？ 愛知県の知多って所で町おこしのため同じ名前のチタを訪問するって聞いてよ、オレらチタの抑留者も連れでって貰ったの。収容所もすっかり更地になってで、何もわがんねがったけど、日本人抑留者のお墓詣りだけして帰って来たんだあ。で、帰りにイルクーツクさ一泊して、観光させて貰ったんだ」
平成元年といえは俺はまだ小学校低学年の頃だ。

——ヨクリユウ…。

とネフスキーさんがつぶやいた。

「ああ、シベリア抑留っていうのは…。戦争で捕まってたんだよね。

じいちゃん？」

——どうだった？

とは訊けなかった。返ってくる応えが、そんな、お母さんが弁当の新作おかずの出来を聞くような聞き方で引き出せるほど軽いものでないことくらいは知っていたからだ。一瞬だけそんなふうに聞いてみようかとも思ったけど、やめた。真摯な気持ちでしか訊けない内容だし、面と向かって真面目に訊くのも面はゆい。

「ドーでしたか？」

かわりにネフスキーさんがその言葉を口にした。彼女の表情はこれまで見たことの無い、憂うような、同情するような、本気で祖父を思いやった表情だった。

「んだなあ：何から話せばいいか…。オレが徴集されたのは仙台の第二師団に属する連隊で、福島、新潟、宮城の新兵と一緒にだった。それで陸軍の二等兵になった。昭和十九年の年末、十九歳の時だった。オレたちやみんな満州行きが言い渡されて、『寒くてイヤだな…』と思った。朝鮮のプサンから汽車で満州の牡丹江って所で下された」
祖父は新聞広告を引き寄せ、その裏に簡単な地図を描きながら説明した。

「そこで初年兵教育を受けたのよ。そんな時期に徴集された奴アみんな体格が良くなくてな。やっと来た新入りだったからか古兵の奴らがよく殴りやがって…。殴られない日はなかった…。そこで友達が出来てな。貝沢って仙台の奴で、髭が濃かった。あとで本人がこっそり教えてくれたんだが、アイヌだったんだ」

「あいぬ？」

「ええと、北海道に住んでいた人たち。アメリカのインディアンみたいな」

「ああ、ロシアにもいっぱいいます。もともと住んでいた人」

「ひよろひよろの兵たちの中で、貝沢だけがやたら張り切ってて…。

まあ真面目に兵隊やってた。中隊長の訓示で『捕虜にはならず、そんな時は投降すると見せかけて手榴弾で敵を道ずれにすべし』って言われた時、オレは『そんなことムリだよなあ』って思った…。どうだべ、哲夫なら出来っぺか？」

「え：イヤできないよ。死にたくないし」

「んだよなあ：でも貝沢はそれにすごく大きな声で返事してな。『ハイツ！』って。何だこいつ、と思ったよ。オレは。ああ、あと八月にソ連が参戦して牡丹江が空襲されて、地方人——民間人のことだな、在留邦人が取り残されてた時だったんだけど。正直、オレどうしたら良いかわがんねくて。でも貝沢はケガ人に駆け寄って、声かけて、もう死んでるって分かったらオイオイ泣いて。ケガ人の血にまみれながら飛行機に向かって吠えたんだ。ウオー！って。すげえ奴だなって思ったけど、どっか変な奴だなとも思ってた。ソ連参戦に慌てている間に終戦さ。結局俺は銃を一発も打たなかった。慰安所にも行かなかった」

祖父はもしかして人を殺したことがあるのだろうか。と思っていた俺は、それを聞いてひと安心した。ネフスキーさんの方を見ると、真剣な表情で祖父を見ていた。そうだ、彼女が生まれたのは今はなきソ連だった。日本とソ連は本当に戦っていたんだな、当事者の話を聞いて、改めてそう思った。

「残留兵たちは寄せ集められて『奉天第五十二大隊』に編成された。

九月の満月の夜に汽車に乗せられて北に出発した。日本に行くなら南に行くはずなんだが、人間悪いことは信じたくないもんで、ウラジオから日本に返されるのだと思った。ところがオレたちが連れて行かれたのは」

祖父がまた新たな地名を書き込む。

「チタだった」

祖父の地図の縮尺だと、ウラジオという海沿いの町と内陸のチタの間は本州ひとつ分くらいの隔たりがありそうだった。

「最初の仕事は自分たちを囲む柵を作ることだった。周りは原野だし、逃げることもできない。そのあとは森林伐採とか土木作業、農作業：最初の冬は：んだなあ。最初の冬は本当にひどかった。栄養失調で死んだ者はほとんどこの時期だ」

「チタの冬はマイナス五〇度にもなります」

「んだ……。とにかく寒かった。生活はまるで原始時代だった。日本軍の冬の防寒道具は劣っていて使い物にならない。年末の寒い寒い時期に、火力発電所の溝掘り作業が始まった。凍土は固く、一日十センチくらいしか掘れない。空腹と寒さと疲れで次々に死人が出た。でも。みんな自分が生きるので精いっぱい、他人にかまっていない余裕はなかった。一年目は飢えと寒さとの戦いだったが、二年目に

なるとソ連側の配給やアメリカの援助物資がちゃんとまわってくるようになって、何とかやって行けるようになった。昭和二十三年——西暦だと一九四八年か？ その七月、帰国が許されるんだけど、二年目三年めは冗談を言うぐらいの余裕はできてきた」

「ああ、あの川柳——」

「冗談って何がかー？」

「いや、何でもない、何でもない……。そうだ、貝沢さんは？」

「貝沢なあ、作業と一緒にすることがよくあって、色々話したなあ。

貝沢は多分、自分がアイヌだってことをオレにしか言っていなかったと思う。差別する奴もいたからな。奴の親父さんの時代は大変だったみたいで、それで北海道から仙台に越して来たんだと。貝沢に赤紙が来た時、親父さんは怒った。なんでは分かるか？」

「んー、今まで自分たちを差別して来たくせに、戦争は手伝わせるから？」

「国はどこも一緒な」

ネフスキーさんはフンツ！と鼻息を出した。

「うん、オレもそう思う。けど貝沢は軍人になるのを喜んだんだと」「軍に入れば『ちゃんとした』日本人になれると思ったからかー？」

とネフスキーさん。その反応の速さに俺は驚いた。

「ヤマト民族中心の日本が琉球とか、アイヌとか、朝鮮とかを力でもって、獵師が網イおつかぶせるようにして捕まえて『お前らも日本人だ、嬉しいだろう』って国家の中に入れちまう。そのくせ差別する。いじわるする。頭にきて当然だべ。でも、貝沢みたいな奴もいた。『ちゃんとした』日本人になりたくて、国に認めてもらいたくて、本土の奴らより兵隊らしくあろうとする…。ソ連の空襲の時の話、あとから聞いたんだ。貝沢も怖かったんだ。当たり前だ。だけど、臆病風を吹かせないように、『ちゃんとした』日本人になれるように、日本の敵のソ連にことさら吠えた。自分の腕の中で息絶えた日本人の血は『同胞の血』。血を布に浸して、それをポケットに入れた。心臓のそばに。ボタンを掛けて誓いを立てた『耐え抜こう。日本人に、俺はなるんだ』だと」

驚いた。戦争＝誰しも嫌なもの、という図式があつた俺にとって、軍人になるのを喜ぶ人、しかも軍人になることで「日本人」になるうとしたマイノリティーがいたなんて。戦争＝悪だとすれば、貝沢さんは悪人だろうか？　こういう形でしか「辺境人」を「昇格」させない当時の空気が悪なのだろうか、そしてそれは「昔の話」で終われるものなのだろうか。今だって、少数派を知らずに追いつめる、見えない空気がある。「辺境」に生まれたのが不幸だったのか？　ちよっと待て「辺境」ってなんだ？　アイヌの世界はアイヌにとっての中央のはずだ。アイヌを「辺境」にした「中央」はだれの中央なんだ？　そこで謀られるたくらみが貝沢さんたちを追い詰めたんじゃないのか？　貝沢さんたちを追い詰めたのは、誰だ？　「なんだか、かわいそうだ」

口にすると同時に、そんな言葉を吐く自分が「中央」の側にいる

ような気がしてしまい、自戒の念も沸いた。

「でもその人は満足していたんじゃない？」

とネフスキーさん。うーむ、そうかも。俺の価値観を貝沢さんに当てはめるのも変というか、失礼なのかもしれない。

——改めて考えると国家とは何なのだろうか？

疑問を思い浮かべているところにネフスキーさんが思いがけない言葉を口にした。

「私も：ヒージーさんは殺されてるんだ。国家に殺された」

「日本でかい？」

祖父が驚いて訊いた。

「んーん、ソヴィエト。日本人の妻と結婚して、一緒にソヴィエトに戻ったんだけど日本のスパイじゃないかって思われて捕まったんだ。そして牢屋で死んだ。ええと一九三七年だったかな？」

「日中戦争がはじまった頃だな」

ネフスキーさんの口調は淡々としたものだった。

「スターリンって知ってるか？　すぐく人を疑って、つかまえて殺したんだ。それでヒージーもヒーバーも捕まった。死んだ。子ども：私のジーちゃんは捕まらなかった。生きた。おとーさんおかしさんが国に殺されたのに、ジーちゃんはドイツとの戦争で兵隊になりたいと思った。さっきの話聞いて、私ジーちゃん思い出した」

「おじいさん軍人になりたかったの？」

「うん、ジーちゃんに聞いた。ドイツと戦争になってみんな泣いてたけど、ジーちゃんは嬉しくて大声あげたんだ。私たちと同じ十七才のくらいのジーちゃん。前から兵隊になりたい！って思ってた。

だけど長い間、ダメって言われた。『お前のおとーさんおかーさんは、革命じゃない運動をやった。牢屋に入れられただろう！』って『はるぶん日本人だろう！』って、『敵は兵隊にできない』って。だからジーちゃんは偉い人に手紙書いた。『私を殺してください。それがだめなら兵隊にしてください』って。そしたら、なっぴいっていう手紙が来て戦争に行った。ジーちゃんは考えた。戦争に行くことが国を大事に思うことで、自分を『ソヴィエト人』にする正しいことだった」

ネフスキーさんが湯呑を手のひらで包み、そこに視線を落とした。

「ジーちゃん、戦争行って死なないで帰ってきて、結婚して、私のおかーさん生まれた。名前、リュブレナとつけた。「リュブリューレーニナ」：「レーニン大好き」という意味。レーニンはソヴィエト作った人な。親をソヴィエトの国家に殺された人が、娘にそんな名前付けた。私、変だな、と思った。でも貝沢さんの話聞いて、ジーちゃん、そうしないと自分じゃなくなるのかも、私そう思った。ヒージーが革命じゃない人とみんなに思われて殺されたから、ジーち

ゃんは革命がんばった。おとーさん殺されておかーさん殺されて悲しかったと思うけど、それでもならなくちゃと思った。ソヴィエト人に」

淡々としていたネフスキーさんだったが、話すごとに目に涙がたまってきて、ハナをすするようにになっていた。俺がティツシュを渡すとネフスキーさんは音を立ててハナをかみ「はなみず、でた」と赤い目で笑った。

四

一九八〇年に日本に生まれた俺にとってソヴィエトという国は「色々大変な所らしい」という程度の印象だった。ゴルバチョフという頭にシミのあるおじさんが、頑張っていた…という印象はある。あとは、チェルノブイリという所で原発事故があり、大変だった…ということの本で読んだことがあるくらいだ。

しかしネフスキーさんが来てから、なんとなく本屋やニュースなどで、ロシアに関することを意識するようになった。自分の家で犬を飼い始めた時、犬を散歩させる人が、初めて自覚的に見えてきたことと似ている。ちなみに飼い犬の名前はニケという。

クラスの皆も似たようなもので、先日、文化祭のクラス企画の話し合いでは、ロシアに絡めた企画案が出された。ネフスキーさんが

恥ずかしがったこともあってか、別案の、海賊をモチーフにした校内スタンプラリーが多数決でクラス企画となった。

男子の中でもネフスキーさんは人気があり、積極的な男子は結構彼女に話しかけているようだ。ネフスキーさんの学校生活が充実するためなら喜ぶべきことだ。：喜ぶべきことだ、と自分に言い聞かせているが、そういう光景を見ると嫉妬を覚えるのも事実だ。特にアホみみたいなクラスの男子が彼女にじゃれて来るのを見ると、おい！と大声をあげたくなる。いや、実際は声を出さないけど。

掃除や教室移動の時などはいつの間にか人ごみからネフスキーさんを探してる自分に気付いた。そうそう、掃除の時、ゴミの分別が不十分だったクラスのゴミ箱に、ネフスキーさんが汚れるのを躊躇せず手を突っ込んで、ゴミの分別を始めたのは驚いた。俺が絡まれた時も助けてくれたし…。聖女か。なんと尊いのか。

ついにネフスキーさんは俺の夢にも出てきた。彼女と腕を組み、街を歩く夢だ。幸せだった。陳腐な表現だが「夢なら覚めないで」とも本当に思った。ああ、この感情を俺は知っているぞお。

ネフスキーさんは女子からは「イリーナちゃん」とか「ねふねふ〜」とか言われていて、彼女自身色んなグループに積極的に話しかけていた。もし自分がロシアの学校に転校するという逆の立場だったら、とてもそんな振る舞いはできないと思い、尊敬して見ていた。

彼女の日本語は、初めからそれなりだったが、クラスメイトとの交流の中でどんどん上達している。本人に訊いたところ、日常会話には問題なし、授業での先生の説明もだいたい分かるという水準のこと。さすがトルストイの国の少女だ。何した人かは知らないが。

ある時、ネフスキーさんが自転車に乗れないということが女子のグループで話題になった。

「ねふねふ、自転車乗れねんだって？」

「ロシアではあまり乗る人いないのよ」

「じゃあさ、うちらで乗れるようにしてあげない？」

「ほんとうかー？」

とその日の放課後から、仲良しの小池さんの自転車を借りて、社の境内で練習会が始まった。俺は下校中に見かけたただだが、ネフスキーさんも小池さんたちも楽しくやっているようで、ネフスキーさんは数日のうちにそれをマスターし、お父さんに自転車を買ってもらうのだとはしゃいでいた。練習を通じて

「ネツケツ！」

「タチコギ！」

など新たな日本語も覚えたようだった。

郷土部の文化祭準備は六月下旬から始めた。文化祭は九月なので、

それほど急がなくともよいのだが、準備を口実に、ネフスキーさんとお話しする機会を作るというスポンサーである。ネフスキーさんの方は、アレクさんのノートをもとに、福島の民俗について調べるのを楽しんでいるようだった（そもそも彼女は何にでも興味を示していたが）。

郷土部の文化祭発表は例年通りポスターによるものである。

テーマは『アレクサンドルⅡネフスキーが見た いわき・相双』とした。

俺は柳田国男の文献に当たり、アレクさんとの交流の文章や各種の習俗についての文章を読み込んでいき、ネフスキーさんはひ孫としてのレポートを作成する。彼女はレポートの文章を頑張ってひらがなで書いていたが、イラストなどを入れていて、案の段階からカラフルな色づかいが女子らしいなあ、と感心した。小池さんの影響かもしれない。小池さんと一緒に取ったというプリクラを一枚もらった。いつもでもネフスキーさんの尊顔を拝せるような場所（眼鏡の内側など）に貼りたいと思っていたが、他人に見られるのも嫌なので、世界史のノートの表紙裏に貼った。

小池さんはクラスの中心的な女子で、部活はバレー部だったと思う。姉御肌な彼女はネフスキーさんを自分たちのグループに迎え、よく面倒を見ていた。文化祭でもみんなで何か発表することを考え

ているようだった。そのことについてある日、部活の作業をしながらネフスキーさんに水を向けてみた。

「ああ、みんなで踊るのよ。ダンス」

「有志発表で？」

体育館の舞台で発表するらしい。

「そーそー、ユーシハツピョウ」

と、イリーナさんがハミングを始めた。どこかで聞いたことがあるような、郷愁をかき立てられるような曲だ。

「カチューシャという曲よ」

ハミングしながらくると回転し、脚をポイポイあげて踊り始めた。バレエとコサックダンスを混ぜたような振り付けだった。回転したネフスキーさんが勢い余ってゴミ箱をひっくり返したので二人顔を見合わせて笑った。

「ヒージーも好きだった曲よ。ノートにも書いてあった」

「あのノート、ロシアのことも書いてあるの？」

「うん、日記みたいなことも書いてあったし、日本のカミサマを観察してる時、ロシアのものと比べて『これが似ている！』なんて書いてある。例えばロシアの古いしきたりについて書いてあったよ。ええと：『ハナムコはハナヨメを、子どもみたいに抱っこして運ぶ。家の守り神さまにみられないように運ぶの』みたいなこと」

なるほど、日本にもありそうな風習だ。ハミングに感じた郷愁の由来は案外そんなところにもあるのかもしれない。

「ダンスの振り付けは自分たちで考えたの？」

「ソーヨ、マミちゃんが考えたのよ」

ゴミを二人で片付けながら訊いた。渡辺マミさん、小池さんのグループだ。

「ああ、あのメンバーでやるのね」

「ソーヨ、五人よ」

ネフスキーさんはまたクルクル回って今度は本棚の方に行き、今度はかけていた眼鏡が床に落ちるほどしたたかにぶつかった。

五

夏休みに入り、課外も終わった八月初め、我が家で庚申講があったのでネフスキーさんをお招きした。夕方から近所のおじさん、おばさんが集まり始め、我が家にいた白人娘を見て驚いていた。俺は彼女の曾祖父がこの庚申の掛け軸を見たかもしれない等々の経緯を逐一説明し、ネフスキーさんは

「スドークんの友達です。よろしくおねがいしますー」

と愛敬を振りまき、祖父に勧められるまま漬物などをつまんでいた。

夕刻六時すぎ、仏間に並べられた座卓が埋まった頃、祖父が

「んでは、そろそろ始めっぺな」

と立ち上がった。おしゃべりをしてきた人たちも、めいめい床の間の方に体を向け、正座に改めた。床の間にはアレクさんのノートにあったものと同じ掛け軸がある。庚申のことを本で調べたところ、掛け軸のモチーフも分かっていた。中心に描かれた憤怒の仏さまは青面金剛というらしい。

この庚申という信仰のルーツは中国の道教にあるという。

人体に巢食う三尸の虫という虫が、庚申の暦の日の夜に抜け出し、天帝に宿主の悪行を報告するのだという。天帝は報告を受けて宿主の寿命を減らしてしまうので、それを防ぐため庚申の夜はみんなが集まって酒宴を開いて夜を明かし、三尸の虫が出ていくのを防ぐのだという。庚申は、本来、不老長寿の祈願という実に道教的な行事だったのだ。

庚申信仰が日本の農村社会に入ると、不老長寿に替わって、より身近な農業の豊作を願う信仰に変容してくるのだが、掛け軸の下方に描かれた、見ざる言わざる聞かざるの絵からは信仰の残滓がうかがえる。自分の悪行を見ないでくれ、聞かないでくれ、天帝に言わないでくれ、というわけだ。青面金剛は腕の一本に人形のようなものの髪を掴んでいるが、これは日本版の三尸の虫とのこと。青面金剛が三尸の虫を捕まえているという意味だ。

祖父が数珠をすり、
——オオ コウシンメイ コウシンメイ マイタリマイタリ ソ
ーワーカー

と唱え事をし、近所のおじさんたちがそれを追いかける。低い声が仏間に響き、犬小屋のニケの遠吠えがそれに和した。ネフスキーさんは文化祭発表用の写真のため、カメラを向けている。

俺は目の前に展開されているこの儀式が、千年以上の前の中国大陸という、遙けき時空間軸の向こうにルーツがあることに思いをはせた。何故か幼いころ祖父に連れられて行った山中で、巨木を目の前にした時の気持ちを思い出した。

三十三回の真言が終わり、その後、直会という食事会になる。本来なら徹夜するのが庚申講なのだが、そこはさすがに簡略化されている。祖父が俺とネフスキーさんのところへやって来た。

「イリーナちゃん、今度きょうだいができるんだってな。庚申さまア拝んどいた方がいいべ」

「でもコーシンさまって、オコメのカミサマじゃないの？」
「なに、変わりやしねえべ。米エ産すのも、子オ産すのも一緒だべ」
「産む、ふえる、という意味では同じだ、と言っています」
と通訳する俺。

「なるほどな」

と言うとネフスキーさんは床の間に向かい、見よう見まねで手を合わせた。おじさんたちからやんやの歓声が上がった。ネフスキーさんはだいたい熱心に手を合わせており、茶色い眉には微かな力が入っていた。

青面金剛掛け軸こと庚申さまにとってみれば、ロシアの美少女に手を合わせられるなんてことは前代未聞のことだろう。もつとも七〇余年前には若き日のアレクさんが手を合わせたのかもしれないが。

六

数日後、俺は一人橇岡を自転車でめぐっていた。町の歴史資料館で手に入れた地図をもとに、路傍にある庚申塔を撮影するためだ。江戸時代、わが町は庚申講が盛んに行われたらしく、各集落の講仲間らが碑をあちこちに造立しているのだ。この日、ネフスキーさんは小池さんたちと学校でダンスの練習とのこと。

さらに翌日、ポスターのレイアウトを確かめに、現像した写真を持って学校へ向かう。ネフスキーさんと初めて会った神社の例大祭のため、通学路は歩行者天国になっていた。部室に行くと鍵が開いていた。おや、と思って中に入るとネフスキーさんがいた。

「おおう、どうしたの？」

「これからダンスの練習があるからな。その前にちよつと来てみた。スドーは？」

「俺はコレ、写真撮ったから」

カバンから庚申塔の写真を出した。

「見せてー」

ネフスキーさんが写真をめくっているのを俺が見ている。

その長いまつ毛が時おり、羽ばたきのように上下するのを見ている。

汚れをいとわずゴミを分別した白い手を見ている。

この一緒にいられる時間がずっと続けばいいと思った。もしネフスキーさんが、だれかほかの異性と付き合ったりするのは嫌だった。自分勝手なことだが、彼女に提案したいことがあった。

「あの一」

「なあに？」

「これ内緒の話なんだけど、クラスの山田さあ鈴木さんのこと好きらしいよ」

「ふーん」

ネフスキーさんは、それがどうした、という顔をしている。

「それで、これも内緒の話なんだけど…。俺…ネフスキーさんのこと、好きだ。付き合ってほしい」

うおー！ 言ったぞ！ しかし――

沈黙。

もし計測した者がいたら、それは数秒間のものだったかもしれない。しかし息がつまりそうな時間だった。ネフスキーさんは俺の視線を外し、ぷっくりと右の頬を膨らませて言った。

「アリガト…うれしい。でも…」

ギャー！ 来た！ 「でも」!? 逆接の接続詞！

「でも…?」

「でも…私ウソついてる。みんなに」

「ウソ…って？」

「私、イルクーツクから来たと言った。それが半分ウソ。本当は、私たち家族はプリピャチというところから来た」

「プリピャチ？」

「わかりやすく言うとチェルノブイリよ」

原発事故——。彼女がそこに——？

「チェルノブイリって…あの!? 原子力発電所の!?」

「ソーヨ、あの事故があったところ…。私が六才のとき。発電所の上で煙が出ているのを家から見たよ。ふつうの煙は白とか黒。でも…あの時の煙は青かった」

俺が住む櫛岡町にも原発がある。福島第二原子力発電所。子ども頃は「エネルギー館」という町の施設に行つて、よく遊んだものだ。しかし今から思えばあれは原発の助成金で作られたもので、中には放射線を学ぶコーナーや原発を動かすゲームがあった。俺は知らず知らずのうちに、原発は危なくない、というイメージを作っていたかもしれない。原発で事故なんて——正直考えたこともなかった。もちろんチェルノブイリなんて「昔の」、しかも「ソヴェエト」のことだし。日本の東海村で何か事故が起こったことは知っていたが、うちは大丈夫、と思っていた。

広島原爆については『はだしのゲン』で読み知っていたつもりだが、まさかチエルノブイリ出身の同世代の子に会うなんて。

「おかーさんが私を連れて家の中に入った。真っ黒い雲が出てきて雨がたくさん降った。水たまりが黄色や緑になったけど、わたしは『へーんなの』と思うくらいだった。今思うと怖いな。バーちゃんはお祈りを唱えてた。『お祈りしなさい！ 世界の終りなんだからね。私たちの罪に対して、神さまが罰を与えたんだよ！』って言ってるから、私は自分の罪を考えてた。新しい洋服をカドに引っ掛けて破っちゃったこと、それをタンスに隠していたことを思いだしたのよ。おとーさんが家に帰ってきて服を全部捨てたあとシャワーを浴びた。おとーさん、化学者だから知ってたの。とつても大変なことになったってこと。テレビをつけるとゴルバチョフが『大丈夫だ』ってずっと言ってた。キンキューの命令出したから大丈夫だ、って。バーちゃんはそれを信じた。ソヴィエト人は信じることに慣れてるの」

と言ってネフスキーさんは少し笑った。

「ゴルバチョフみたいな人のこと日本語でなんて言うの？ 国を動かすやつ」

「政府？ 政治家？」

「——ソーソー、セーフね。とネフスキーさん。」

「数日間家族はずっと家で過ごした。私は何だか皆でいるのが楽しかった。おとーさんは仕事先に電話したり、モスクワのおじさんの所に電話したりしてた。バーちゃんは事故のことをあまり気にしないで外を歩いていた。畑のものを持ってきたりするとおとーさんがすぐ怒って、二人でけんかになった。『ずっと自分の畑で採れたジャガイモで生きてきたのに。何で食べてちゃダメなの！』って『なんならこの薪も洗って使うかー』って。この前スドーの家に行ったとき、スドーの田んぼ見た。スドー笑って私に教えてくれた。オコメつくる田んぼだって。私あまり覚えてないけど、私の家の畑もバーちゃんイッショウケンメイ育てたんだって少し思い出した」

俺はあの時のネフスキーさんの横顔を思い出していた。

「おとーさんは仕事を辞めてプリピャチからおじさんのいるモスクワに引越すことにした。バーちゃんは嫌がってまたケンカになった。結局バーちゃんはプリピャチに残ることになった。私バーちゃんとお別れしたくなくて一緒に泣いた。バーちゃんはモスクワの家は狭いこと、ずっと生きていた場所で死にたいことを話してお別れした。友達にさよならを言えないまま、お気に入りクルミの木や、サクラの木にさよならも言えないまま家を出ることになった。プリピャチはほんとうに良いところだった」

ホントウに……。とネフスキーさんは繰り返した。

「テントウムシ、カエル、ミミズ：なんでもいたのよ。その年の春は私の好きな花もきれいに咲いてた。日本で調べた。ライラックという花。私は思わずライラックの匂いをかいだんだけど、そのライラックは匂いが全然しなかった。沢山咲いてるのに風も匂わない。へーんなの、って思った後、ちょっと怖くなった。なんだか今までとは違う世界になったみたい。透明に汚されたみたい」

「その：俺は広島のことくらいしか知らないんだけど、放射能で被曝して、変になっちゃったってこと？」

「私も知ってる。ヒロシマのこと調べた。ヒバクシャ：知ってる。チェルノブイリも同じと思う。原発のことも調べた。スドーが住むナラオカにも原発があって、抜かれました。ドギモを」

今度は俺が少し笑った。

「もしかしたらヒバクしたのかもしれない。ライラックは。：モスクワではアパートに住みました。キョーサントー員のおじさんがセーフに話してくれて：。でもセーフはプリピャチには何もしなかった。ソヴェエトはセーフの国で、人々の国じゃないの。私、スドーのジーちゃんの話聞いて同じこと思った。国家について考えた。国家は国家を一番大事に思っで、そこに住んでいる人の価値はないのよ。それがよく分かった」

——投網を投げられたように国家に帰属させられたアイヌ民族。

——未曾有の原発事故で国家から棄てられたチェルノブイリ人。
両者とも、国家の枠組みの中でマイノリティとされた人々だ。彼らと国家、俺はどちらの側にいるのだろうか。いや、どちらの側に立つべきだろうか。

「ミンスクという所から汽車に乗った。おばさんが私に『どこから来たの?』と言って私が答えると、おばさんは汽車から降りるふりをして、別な席に移った。他のみんなもさりげなく離れて行って、子どもたちにもそばを走らせなかった。モスクワに行ってからもう。私たちは同じよ。ごく普通のソヴェイェト人よ。ところが。あの日以来、突然チェルノブイリ人に変わった。珍しいものに。みんな関心を持っているのに、みんな知らない：何かそういうものに。みんなと同じでいたくてもダメ。ヒバクシャだから違う目で見られる。学校に行っても同じ『チェルノブイリは怖かった?』『どんなふうに燃えてた?』『で、イリーナには子どもが出来るの?』私たちが失くしたのはふるさと、そして人生なのよ。おとーさん、おかーさんもそう。赤ちゃん欲しかったけど、おじさんに言われた。『赤ちゃんを産んでも大丈夫かー? 産むことが罪になることがあるのだぞ』って」

——子どもを産むことが、愛することが罪になるなんて。

僕は今まで当たり前前に思っていたことに揺らぐのを感じた。

世の中には愛が原因でストーカー事件や殺人事件が起きている。でもそれは人の「愛し方」が時として罪となるという話だ。それに對してチェルノブイリ事故に対するおじさんの話は、人を「愛すること」そのものが罪なり、人を生むこと自体が罪であるという。そんなことがあってたまるか、という気分がある一方で、おじさんが怖いと思う気持ちも分かる気がした。あれ、でも…？

「今ネフスキーさんのお母さんは…」

言葉に出てしまった。

「うん。赤ちゃん産む。産むことにしたんだ。モスクワから数年でいろいろ引越して、ソヴェエトがなくなって、外国に行ける準備をして…。イルクーツクにいたのは、日本語学校に行ってたほんの少しだけ。日本に行けることになって日本で赤ちゃん産むことにした。この十年は私たち家族の戦いのようなもの。今日もおかーさん病院に行ってる。でも私、少しこわい。私のきょうだい大丈夫に生まれて来るか、私その子を可愛いと思えるか。私心配。こわい…」

ネフスキーさんはメガネをはずして、ポロリとこぼれた涙を拭いた。俺は何と声をかけていいか分からず、ただ隣に座ってネフスキーさんの手に、自分の手を重ねた。

「一度だけプリピャチに戻ったことがあった。バーちゃん死んだとき。ガイガーカウンターがガリガリ鳴ってて五キュリー…六キュリ

ー……。キュリーとかベクレルとかシーベルトとか、そんな放射線の単位なんて知らないまままでいたかった……」

俺はその知識を、幸い知らずに済んでいる。

「……赤ちゃん、いつ生まれるの？」

「もうすぐよ。私よりおとーさんおかーさんの方が心配していると思う。こわいと思うよ」

——じゃあネフスキーさんがそばにいてあげなくちゃ。

とは言えなかった。他人事のような響きだし、上から目線な気もする。かといって漫画の主人公のように、

——俺がついてるから。

などと言うのはもつと違うような気もする。

「そんな大事なことを話してくれてありがとう……。すごく言いづらいことだったよね」

と言うのが精いっぱいだった。

「スドーの秘密も聞いちゃったからな！」

と、涙を拭いたネフスキーさんが笑顔を見せた……と思ったらすぐ表情に影がさした。

「スドーの気持ちはうれしい。でも私は……私のこと秘密にしていた。

私はチェルノブイリにいたんだ。それでも……スドーは私を……」

そこで言葉が途切れる。固く結ばれた彼女の唇がわずかに震えた。

「だから私は…、私はプリピャチのライラックかもしれないだ…。
ヒバクして香りがしない、へーんなライラック…」

そう言うとネフスキーさんは立ち上がり、部室のドアを開け、

「うれしかった。ありがとう」

と微笑を浮かべて部屋を出て行った。

俺は二〇秒ほど呆けていた。二十一秒経ったところでハッと我に返った。

ネフスキーさんはチェルノブイリ被曝者、産まれてくるきょうだいが「大丈夫」かどうか心配。彼女は「香らないライラック」かもしれない――。

告白したら告白で返された。

しかも後者は恋愛の告白ではなく、自己の社会的意味を開示した重い告白だった。

ショックを受けてない、と言えばウソになる。他の高校生がどうかは知らないが、自分の中で異性と付き合うということは、幸運が伴えば生涯を共にしたい、ということの意味していた。

――もしかしたらネフスキーさんも同じような観念の持ち主かもしれない。

彼女の告白の内容を聞いて、そう思った。

そしてそれは、

——被曝した私を配偶者として認められるのか？

という問いを突き付けている。

誠実だ、と思う。

問いには応えなければいけない。

一瞬、ネフスキーさんのきょうだいが生まれてから——「大丈夫」かどうか見てから応えるなんてことが頭をよぎった。もしかしたらそれは賢い方法かもしれない。しかし俺はもう彼女の前で、賢しらに振る舞って自分の感情を曲げることはしたくなかった。

そうだ、あの日、初めての出会いで後悔してからは。

俺はバネのように立ち上がり、部室を出た。

彼女は？ ダンスの練習か？

渡り廊下を走り、二棟へ。体育館に向かう階段を駆け下りようとしたらネフスキーさんを見つけた。階段下で右足を押さえてうずくまっていた。

「どうしたの!? 大丈夫？」

「あっ…ポケベルにびっくりして転んでしまった」

足を見る。目立って腫れてはいないようだ。

「痛い？」

「イターイ！ でもそれより…これはウマレルと書いてあるのか
ー？」

とネフスキーさんがポケベルの液晶画面をこちらに向けた。

——キョウウマレル スグビヨウインニコイ
とあった。

「えっ！ 今日生まれる、病院に來い：って、赤ちゃん産まれるってこと!？」

「やっぱりソーカ。産まれるみたい。病院いかなきゃ：」

ネフスキーさんが立ち上がるが、顔をゆがめた。

「イターイ！」

「とりあえず保健室に行こうよ」

うなづくネフスキーさんが片足飛びで歩こうとしたので、彼女の右側に回り、少し躊躇ったが肩を貸した。自分が汗臭くないか気になる。

夏休みのためか保健の先生はいなかった。湿布薬があったのでそれを拝借しネフスキーさんに渡した。

「俺、タクシー呼んでくる。他には何か用事ある？」

「あ、スミカちゃんかマミちゃんに会ったら、練習行けないって伝えてほしい」

「了解」

体育館の小池さんに一言かけ、事務室前の公衆電話でタクシー会社に電話をしたが、残念ながら神社のお祭りによる交通規制のため

来られないという。

保健室に戻る。足首に湿布を貼ったネフスキーさんが、その上からソックスをはき直しているところだった。

「お祭りでタクシー来られないって。ネフスキーさんは学校に自転車であつてるの？」

「ソーヨ。今日も。でも足がイタイから乗るのは難しいな」

「じゃあ俺がこぐから、ネフスキーさんは後ろに乗りな」

「ほんとう？　へーキか？」

「病院は松ヶ丘病院だよな？　平気平気」

平気ではなかった。

ネフスキーさんはスカートを気にしながら、自転車の荷台にまたがり、ローファアを後輪のハブに乗せている。

アスファルトを溶かすばかりの八月の熱波が容赦なく降る中、二人乗りの自転車をこいで行くのは辛かった。本当はダメなのだが（そもそも二人乗りが違反だが）、危ないので歩行者のいない歩道をのろりのろりと進む。

人ごみが予想される駅前から旧商店街に抜ける道ではなく、中学校の方から下って旧商店街の一番奥の松ヶ丘病院に回り込む道を行うことにする。こちらは木々に囲まれた閑静な道路で、日陰も多い。

ただ中学校までの道が急な登り坂なのが大変だ。

「大丈夫かー？」

ネフスキーさんの問いに、だいじょうぶ、と応える。全然だいじょうぶじゃなかったが、そう応えるしかない。だいじょうぶ…きつと大丈夫だ。

「スマナイネエ」

とどこで覚えたのか、老婆の声真似をしたネフスキーさんが言った。

バランスを崩さないように立ちこぎでなく、座りこぎで登る。両腕を、もともとそれがハンドルから生えている物のようにガツチリ固定しペダルを踏み込む。その力が逃げないように、後ろのネフスキーさんが落ちないように。

上腕の筋肉がピリピリするのを感じながら坂の上を見つめる。あと少しだ。あと少し…。

そこにたどりついたらネフスキーさんに返そうと思った。

彼女から預けられた問いの応えを。

…坂の上で数秒息を整える。ここから先は下りだ。カーブがあるので、今度はスピードが出過ぎないようにブレーキを絞る。

「ネフスキーさん！」

「んー？」

後ろに座るネフスキーさんの表情は、当然見えない。

「俺、やっぱりネフスキーさんが好きだ。もしも匂わないライラックだとしても、一緒に居たい！」

表情は見えない。が、背中に何か暖かいものがふれた。彼女のおでこだった。

「：ヒージীরのノートにあった、ハナムコとハナヨメの話、覚えるかー？」

「うん？」

花婿は花嫁を家の守り神さまに見つからないようそっと抱っこして運ぶ——と言う話か。

「ヒージীরの時代、ソヴイェトという強くて大きいものが、まるで新しい神さまみたいにみんなの前に出てきた。ヒージীরもそれに捕まって死んじゃった」

同じ時代の俺の祖父も日本に現れた「それ」の被害者と言える。ネフスキーさんの祖父や貝沢さんはマイノリティーとして「それ」をむしろ積極的に受け入れていった。そしてネフスキーさんの家族は、チェルノブイリ原発事故で、再び「それ」から見捨てられた。自転車はカーブを曲がった。

ここから先は緩やかで真っ直ぐな下り坂。ブレーキを緩めると風が生まれた。

「でもな、今私、抱っこされてるハナヨメの気分だ。きみはその、新しい神さまが見ていないスキに私を連れてってけると言った。抱っこじゃなくて自転車でだけど」

俺は慌てて自転車を停めてネフスキーさんの方を見た。

俺も汗だくだろうが、ネフスキーさんも汗で髪の毛が風呂上りのように濡れており、頬も赤らんでいた。悪戯っぽく笑っている。頬が赤いのは暑さのためだけではないかもしれない。

「それって、俺の告白を受けてくれるってこと？」

「ソーヨ。きみは鈍いな。ヒュヒョーゲンだ。ヒュ。知ってるかー？」

と言いつつ、照れたように横を向いた。そしてクシャツと泣き顔になった。俺は彼女を抱きしめたい気持ちになったが、それを自制し、ありがとう！と言ってまた自転車をこぎ始めた。後ろからネフスキーさんの「ありがとう」も聞こえた。湧き上がる多幸感で、いくらでもペダルを回せそうだった。

松ヶ丘病院が向こうに見えてきた。

「さすが、そんな風に応えるなんて…！」

「なにー？」

俺は少しだけ後ろを向いて

「さすがドストエフスキーの国の女の子だ！」

と言った。何をした人かは、知らないけど。

(了)